

## 出エジプト記8-9章「神々を圧倒する主」

### 1A 呪術者を圧倒する力 8

#### 1B ファラオの家に及ぶ災い 1-15

##### 1C 呪術者の真似 1-7

##### 2C ファラオの初の願い 8-15

#### 2B 神の指 16-19

#### 3B 区別される方 20-32

##### 1C 王家と全土 20-24

##### 2C 初めの妥協 25-32

### 2A 主だけの御力 9

#### 1B 知っても拒む罪 1-7

#### 2B 呪術者への裁き 8-12

#### 3B すべての災害 13-35

##### 1C 忍耐される方 13-21

##### 2C 前代未聞の災い 22-26

##### 3C 憐れみを利用した高ぶり 27-35

## 本文

出エジプト記 8 章を開いてください。私たちの学びは、主がモーセとアロンによって、ファラオとエジプトに対して、災いを下しているところに入っています。九つの災いがあり、三つの災いごとにまとめられることとお話ししました。第一ラウンドは、ナイル川が血になることから始まりました。

私たちは前回、ファラオが心を頑なにしましたが、そこに呪法師たちがいました。アロンが杖を蛇に変えても、呪法師たちも同じことをします。ナイル川を血に変えても、彼らも同じ秘儀を見せます。それで、ファラオの心は頑なになるのです。このように、人が神を信じるのを妨げるべく動く、偽預言者、偽教師のような存在がいます。そしてナイル川が血になって、民が、飲み水がなくなって、困っている時も、ファラオは自分のことではないので平気でした。

そこで、主は圧倒的な力をもって、ファラオの心をくじかれます。また、これら呪法師たちも、全く太刀打ちできなくされます。そんな中でも、なおのことファラオは心を頑なにします。そして、その頑なにファラオを、すぐに滅ぼすことなく、なおのこと立てておられるのが、私たちの神です。ファラオとモーセとアロンの間にある、やり取りによって、私たちが直面する戦い、また奮闘を見ていきたいと思います。

## 1A 呪術者を圧倒する力 8

### 1B ファラオの家に及ぶ災い 1-15

#### 1C 呪術者の真似 1-7

<sup>1</sup> 主はモーセに言われた。「ファラオのもとに行って言え。主はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。<sup>2</sup> もしあなたが去らせることを拒むなら、見よ、わたしはあなたの全領土を蛙によって打つ。



©2001 NEFERCHICHL.COM

主がナイル川を打たれてから、七日が経ちました。その後しばらくして、血が元通りの水になり、ナイル川にも生命が戻ってきました。そこにいるのは大量の蛙です。

エジプトでは蛙がナイル川の豊かさの象徴となっていました。そこで、神としてあがめられていました。ヘクトという女神です。蛙の頭を持っています。そして、蛙の形が胎児にも似ているので、多産の神でもありました。蛙によって打つと主は言われますが、蛙を殺すことではありません、その反対です。

<sup>3</sup> ナイル川には蛙が群がり、這い上がって来て、あなたの家に、寝室に入って、寝台に上り、またあなたの家臣の家に、あなたの民の中に、さらに、あなたのかまど、こね鉢に入り込む。<sup>4</sup> こうして蛙が、あなたと、あなたの民とすべての家臣の上に這い上がる。』」

蛙が、家の中にも入るほど大量発生します。良いもの、豊かさを与えるものも、もしそれがあつすぎると呪いになります。民数記で、肉がほしいと言って、食べきれないほど与えられて、その後、死んでしまったという裁きがありましたね。

そして寝室に、寝台に上ってきます。寝るという行為が非常に不快なものとなります。次に、食べるという行為にも大きな問題が起こります。料理を作るかまどやこね鉢にも入り込みます。こうやって、ナイル川については他人事のように冷淡なファラオが、他人事にはできなくさせるのです。日ごろは、福音に対して冷淡な人が、いざ、自分の目の前の生活が大変なことになったら、そんな批判ができるか？ということですね。

<sup>5</sup> 主はモーセに言われた。「アロンに言え。『杖を持って、あなたの手を川の上、水路の上、池の上に伸ばせ。そして蛙をエジプトの地に這い上がらせよ』と。」<sup>6</sup> アロンが手をエジプトの水の上に伸ばすと、蛙が這い上がって、エジプトの地をおおった。<sup>7</sup> 呪法師たちも彼らの秘術を使って、同じように行った。彼らは蛙をエジプトの地の上に這い上がらせた。

ナイル川は、春から夏にかけて洪水が起こり、氾濫します。そして秋になって、水位が下がり、そのためにあちこちに、ため池のようにして水が残ります。そこにも蛙が棲息しています。その蛙にも杖を向けて、水路や池の上にも伸ばしています。

### 2C ファラオの初の願い 8-15

そして、呪法師たちも自分たちの秘術を使って、同じことはしました。ところが、ファラオは、ナイル川が血になった時のように、見向きもしないということではありません。

<sup>8</sup> ファラオはモーセとアロンを呼び寄せて言った。「私と私の民のところから蛙を除くように、主に祈れ。そうすれば、私はこの民を去らせる。主にいけにえを献げるがよい。」

ファラオは呪法師らに蛙を取り除くことを願いに行きませんでした。モーセとアロンにお願いしてきました。つまり、彼は分かっていたのです。モーセとアロンでないと、蛙は取り除けないと。偽りの力は、また偶像の力は、自分が頑なになるために同じようなことができこそすれ、いざという時には役に立たないことを知っているのです。

私たちも、いつもは福音を聞いても反感を抱き、背を向けている人々にも寄り添いたいです。反対しているからと言って、私たちも敵対したら元も子もありません。その人たちがいざという時、自分の頼りにしているものが何も役に立たないことを知る時、けれども、キリストを伝えていた私たちには、尋ねることができるかもしれないと思うかもしれません。

<sup>9</sup> モーセはファラオに言った。「蛙があなたとあなたの家から断たれ、ナイル川だけに残るようにするため、私が、あなたと、あなたの家臣と民のために祈るので、いつがよいかを指示してください。」

<sup>10</sup> ファラオが「明日」と言ったので、モーセは言った。「あなたのことばどおりになりますように。それは、あなたが、私たちの神、主のような方はほかにいないことを知るためです。<sup>11</sup> 蛙は、あなたと、あなたの家、家臣、民から離れて、ナイル川だけに残るでしょう。」

モーセは、ファラオに敢えて、いつ祈ればよいか尋ねています。ファラオ自身が決めることによって、イスラエルの神に関わらざるを得ないようにさせています。そして、モーセは、釘を刺しました。今の不快を取り除くためではなく、主のような方は他にいないことを知るためです、と言っています。多くの人が神からの便益は求めても、神を求めませんが、ファラオも例外ではありません。

<sup>12</sup> こうしてモーセとアロンはファラオのもとから出て行った。モーセは、自分がファラオに約束した蛙のことで主に叫んだ。<sup>13</sup> 主がモーセのことばどおりにされたので、蛙は家と庭と畑から死に絶えた。

モーセは、平然とファラオの前にいましたが、自分の言ったことを、信仰によって宣言したのですが、本当に起こらなかったら大変なことになります。それで、必死に祈っています！面白いです。

<sup>14</sup> 人々はそれらを山のように積み上げたので、地は悪臭で満ちた。<sup>15</sup> ところが、ファラオは一息つけるとすると、心を硬くし、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が言われたとおりであった。

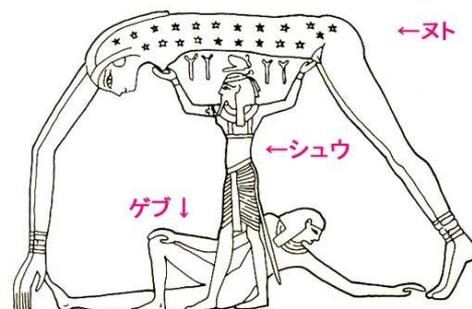
まさに主が言われたとおりです。取り除いてくれ！と叫びましたが、まさに「困った時の神頼み」であります。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という言葉があるように、熱い時に、「主に祈ってくれ。いけにえを、ささげてもよい」と言ったのですが、それが過ぎたので心を硬くしました。

## 2B 神の指 16-19

<sup>16</sup> 主はモーセに言われた。「アロンに言え、『あなたの杖を伸ばして、地のちりを打て。そうすれば、ちりはエジプトの全土でブヨとなる』と。」<sup>17</sup> 彼らはそのように行った。アロンは杖を持って手を伸ばし、地のちりを打った。すると、ブヨが人や家畜に付いた。地のちりはみな、エジプト全土でブヨとなった。

第一ラウンドの最後、三つ目の災いです。三つ目の災いは、警告なしで下ります。第一の災いで心を頑なにし、第二の災いでチャンスを与えたのに応答しなかったので、第三の災いは、そのまま警告なしに与えます。

その災いは、ブヨです。ハエよりはずっと小さく、けれども蚊のように、かまれると痒くなります。ナイル川にはブヨが多いと思いますが、ここではナイル川からではなく、大地そのものがブヨになります。今のようにアスファルトで舗装されていないので、その恐ろしさはひとたまりもなかったでしょう。エジプト人は、土地を「ゲブ」として拝んでいました。ゲブが裁きを受けたのです。



<sup>18</sup> 呪法師たちも、ブヨを出そうと彼らの秘術を使って同じようにしたが、できなかった。ブヨは人や家畜に付いた。<sup>19</sup> 呪法師たちはファラオに「これは神の指です」と言った。しかし、ファラオの心は頑なになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が言われたとおりであった。

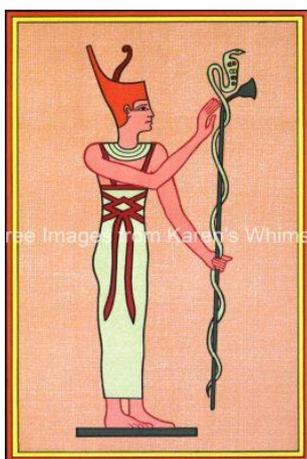
ここでついに、分岐点が来ました。呪法師たちが、秘術でブヨにすることができませんでした。杖を蛇にするところから始まり、エジプトの神の力と、ファラオの権威を示すために、しるしを行っていました。もうここでできなくなったのです。闇の力には、限度があるのです。その境界線は「創造」の働きです。塵からブヨを出すことは、無いものを有るものにするのですから創造主しかすることができません。世の霊は力を持ちますが、神のいのちの御霊のみが、新しい創造を行われます。

呪法師は「これは神の指です」と言っています。聖書には「神の指」という表現が何回か出てきますが、例えば詩篇 8 篇 3 節には、「あなたの指のわざであるあなたの天あなたが整えられた月や星を見るに」とあります。そしてバビロンが一夜にして滅ぶその直前にも、「ダニエル 5:5 ちょうどそのとき、人間の手の指が現れ、王の宮殿の塗り壁の、燭台の向こう側のところに何かを書き始めた」とあります。神の恐ろしい裁きの予兆としての、神の指でした。

### 3B 区別される方 20-32

#### 1C 王家と全土 20-24

<sup>20</sup>主はモーセに言われた。「明日の朝早く、ファラオの前に出よ。見よ、彼は水辺に出て来る。彼にこう言え。主はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。<sup>21</sup> もしもわたしの民を去らせないなら、わたしは、あなたと、あなたの家臣と民、そしてあなたの家々にアブの群れを送る。エジプトの家々も、彼らのいる地面も、アブの群れで満ちる。



第二ラウンドの始まりです。第四の災いは、アブです。初めに、朝早く、ファラオの前に出て行くために、ナイルの水辺に行っています。前回話しましたように、ファラオは日課として川の前で神々に礼拝を捧げるためにナイル川の岸边に来ていました。

そしてアブですが、ブヨよりも大きく、血を吸うサシバエです。ナイル川の湿地を治める「ウチヒト」と呼ばれる神と関連づけられます。ナイル川の豊かさを、蛙と同じように表しているものだったのでしょう。しかし、それらが「群れ」で来ています。恩恵を表しているようなものも、多くなりすぎれば災いとなります。そして蛙の時と同じように、これらが家々の中にまで入り込み、痛めつけるのです。

<sup>22</sup>わたしはその日、わたしの民がとどまっているゴシェンの地を特別に扱い、そこにはアブの群れがないようにする。こうしてあなたは、わたしがその地のただ中において主であることを知る。<sup>23</sup>わたしは、わたしの民をあなたの民と区別して、贖いをする。明日、このしるしが起こる。』」

第二ラウンドから始まる、神の働きは、午前礼拝で学びましたように、この区別です。イスラエルの子らが住んでいたゴシェンの地だけは、アブの群れがないようにします。そのことによって、主ご自身が、エジプトの只中にあるようにするのです。

多神教の世界では、エジプトではエジプトの神でありました。地域性がありました。けれども、ヘブル人の神は、すべての神、神々の神であり、エジプトの神でもあられます。イスラエルの子らによって、神がおられることを示しているのです。同じように、日本の人々は、日本には八百万(やおよろず)の神々がいて、キリストは欧米の神なのだという分け方をします。しかし、違います。どこにい

でも、そこにキリストがおられるということ、この日本でも主はおられるということ、私たちが救われているということで、証しするのです。

<sup>24</sup> 主はそのようにされた。おびたしいアブの群れが、ファラオの家とその家臣の家に入って来た。エジプトの全土にわたり、地はアブの群れによって荒れ果てた。

アブの群れは、蛙のように、ファラオの家と家臣の家の中にも入ってきました。また、エジプト全土も荒れ果てさせました。

### 2C 初めの妥協 25-32

<sup>25</sup> ファラオはモーセとアロンを呼び寄せて言った。「さあ、この国の中でおまえたちの神にいけにえを献げよ。」<sup>26</sup> モーセは答えた。「それは、ふさわしいことではありません。なぜなら私たちは、私たちの神、主に、エジプト人の忌み嫌うものを、いけにえとして献げるからです。もし私たちがエジプト人の忌み嫌うものを、彼らの目の前でいけにえとして献げるなら、彼らは私たちを石で打ち殺しはしないでしょうか。<sup>27</sup> 私たちは、主が私たちに言われたとおり、荒野へ三日の道のりを行って、私たちの神、主にいけにえを献げなければなりません。」

ファラオはついに、「おまえたちの神にいけにえを献げよ」と言っています！けれども、条件付きでした。「この国の中で」であります。妥協案ですね。これから、ファラオが何回か、妥協案を出します。このことを、まとめて次週の日曜日の午前礼拝でお話したいと思っています。世は、私たちの信仰、神への献身に反対しても、私たちがぶれないと、今度は妥協案を出してきます。

まず、モーセの断りではありますが、これは理にかなっていません。エジプト人は、家畜を神々としてあがめていました。彼らも神々への食べ物として家畜を屠っていました。けれども、血による注ぎかけを祭壇で行う、ヘブル人の儀式は忌み嫌っていました。覚えていますか、ヨセフのところに兄たちがベニヤミンを連れてやってきた時に、食事の席を別々にしていました(創世 43:32)。だから、三日の距離を置いて、見えないところでいけにえを献げるのです。

「この国の中でおまえたちの神にいけにえを献げよ。」と言っています。これを言い換えれば、「主に仕えるときに、今までの生活を変えないで、心の中だけで信仰していればよい」というものです。しかし、私たちはこの世から選り分けられて、神のものとされた民です。主を礼拝するのであれば、自分のこれまでの生活が改まり、ある時には思い切って切り捨てるものもできます。(Ⅱコリ 6:17-18)

<sup>28</sup> ファラオは言った。「では、おまえたちを去らせよう。おまえたちは荒野で、おまえたちの神、主にいけにえを献げるがよい。ただ、決して遠くへ行ってはならない。私のために祈ってくれ。」

ファラオは、譲歩しているように見せて妥協を迫っています。「ただ、決して遠くへ行ってはならない。」であります。遠くに行ってはならない、という誘惑を私たちは受けます。信仰生活において、自分のこれまでの生活から遠く離れたような新しい生活になります。それが、そんなに変わることなく近くでいようということになります。

<sup>29</sup> モーセは言った。「今、私はあなたのもとから出て行き、主に祈ります。明日、アブが、ファラオとその家臣と民から離れます。ただ、ファラオは、民が主にいけにえを献げるために去ることを阻んで、再び欺くことなどありませんように。」

モーセは、祈ってくれというファラオの要請には答えます。けれども、すでに蛙のことで、ファラオは前言を翻しています。だから、再び欺くことがありませんようにとっています。

<sup>30</sup> モーセはファラオのもとから出て行って、主に祈った。<sup>31</sup> 主はモーセのことばどおりにされた。アブは一匹残らず、ファラオとその家臣、および民から離れた。<sup>32</sup> しかし、ファラオはまたも心を硬くし、民を去らせなかった。

ファラオにとって、祈ってもらうということは、アブによる苦痛が取り除けられることであって、主なる神の言うことに聞き従うことではないのです。言い換えれば、自分に仕えてもらえるような神であれば受け入れるのですが、自分が聞き従うような神ではないのです。

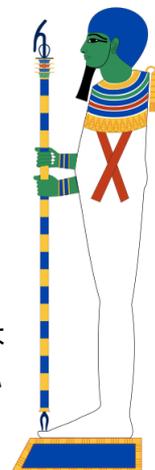
## **2A 主だけの御力 9**

### **1B 知っても拒む罪 1-7**

<sup>1</sup> 主はモーセに言われた。「ファラオのところに行って、彼に言え。ヘブル人の神、主はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。』<sup>2</sup> もしあなたが去らせることを拒み、なおも彼らをとどめておくな、<sup>3</sup> 見よ、主の手が、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に下り、非常に重い疫病が起こる。

第二ラウンドの第二の災い、あるいは第五の災いです。第五の災い、二周期においては第二の災いです。彼らにとって大事な財産である家畜に神は手を下されるということです。前回、ナイル川がエジプトにとって命であることを話しましたが、家畜も彼らにとって極めて貴重でした。エジプトの文学や壁画には、家畜が鮮やかに描かれています。日常生活にとって欠かせない存在であり、それゆえ神聖なものとしてあがめられました。

家畜、馬、ろば、ラクダ、牛、羊に非常に重い疫病が起こります。この言葉から、これは死亡率の高い疫病で、感染率の高いものであると推測されます。牛や羊の他に、馬がいいますが、後世で、馬がエジプトにおいて最良種のもを輸出していることが、ソロモンの



王朝で伺い知ることができます。馬は、運搬の他に戦闘に使うものです。また、ラクダは運搬用であり、その地域で最も大きな動物とされ、貿易にも欠かせないものです。

主は、ご自分が神であることを示されるために、その人に注意喚起を与られます。それに応答しないのであれば、その声を大きくしていきます。徐々にその人の身近にあるものへと触れていき、御声を大きくされるのです。



エジプト人が家畜を神聖なものにしているということについてですが、メンフィスには、プタハという神がアピスという牛として現れたとされていました。エジプトで世界遺産に指定されているメンフィスの墓地遺跡群には、地下に巨大な棺桶がいくつも見つかっています。それがアピスの牛を葬ったものです。そしてアピスはミイラにもされていました。



そして羊また牛によって表されていたハトホルという女神がいます。愛と幸運の神です。カナン人が拝んでいたアシュタロテに匹敵します。これらの神々が今、疫病によって打たれたのです。

<sup>4</sup> しかし、主はイスラエルの家畜とエジプトの家畜を区別するので、イスラエルの子らの家畜は一頭も死なない。』<sup>5</sup> また、主は時を定めて言われた。「明日、主がこの地でこのことを行う。」

主は再び、区別をすることによってご自分の救いを表されます。

<sup>6</sup> 主は翌日そのようにされた。エジプトの家畜はことごとく死んだが、イスラエルの子らの家畜は一頭も死ななかった。<sup>7</sup> ファラオは使いを送った。すると見よ、イスラエルの家畜は一頭も死んでいなかった。それでもファラオの心は硬く、民を去らせなかった。

ファラオが使いを送ったということは、主のことばが気になっていることを表しています。本当に信じていないのであれば、使いなど送らなくてよかったのです。確かめているということは、主のことばが気になっているからです。それにも拘らず、去らせていません。彼は、見ていないから信じていないのではなく、見ても、信じないのです。これが心の頑なさの問題です。

## 2B 呪術者への裁き 8-12

<sup>8</sup> 主はモーセとアロンに言われた。「あなたがたは、かまどのすすを両手いっぱいに取り。モーセ

はファラオの前で、それを天に向けてまき散らせ。<sup>9</sup> それはエジプト全土にわたって、ほこりとなり、エジプト全土で人と家畜に付き、うみの出る腫れものとなる。」

第六の災い、第二ラウンドの最後の災いです。警告なしに行われます、膿の出る腫物です。「かまどのすす」をファラオの前でまき散らします。これは、イスラエルの民が奴隷として、かまどを使って煉瓦を作っていたその煉瓦を想起させるものです。主は、イスラエル人を虐げたことに対する報復としてこの災いを下しておられるのかもしれませんが。神の裁きは公平であり、その行ったことに応じて報いを与えられます。(Ⅱテサ 1:6-7)



そして受けている「うみの出る腫れもの」ですが、これはヨブがかかった重い皮膚病に近いものでしょう。膿が出てきて流れ出ているようなものです。当時のエジプトでは、伝染病などを司る女神として、セクメトがいました。彼女は、先ほどのアピスという牛として現れたプタハという神の妻です。頭がライオンであり、頭の上に赤い円盤を載せていて、太陽の灼熱を表しています。この彼女を静められるセクメトの神官たちが、伝染病などを鎮める特殊な医師や呪術師とされていました。そこで、この膿の出る腫物を癒すための呪法師の出番なのですが、ところが彼らがもうファラオの前に立てなくなっているのです。

<sup>10</sup> それで彼らは、かまどのすすを取ってファラオの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と家畜に付き、うみの出る腫れものとなった。<sup>11</sup> 呪法師たちは、腫れもののためにモーセの前に立てなかった。腫れものが呪法師たちとすべてのエジプト人にできたからである。

ついに、この災いをもって、主は、反対する呪術者に裁きを下しました。この呪法師の名が、ヤンネとヤンブレと言います。「たぶらかしている者たちは、ヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らっており、知性の腐った、信仰の失格者です。(2テモテ 3:8)」これら呪法師らは全ての体毛を剃って、体がきれいなことが宗教上必要なことでしたが、彼らに対する怠りなき裁きが、ここで行われているのです。

<sup>12</sup> しかし、主はファラオの心を頑なにされたので、ファラオは二人の言うことを聞き入れなかった。主がモーセに言われたとおりであった。

ファラオが心を硬くしたと書いてあるのではなく、主が彼の心を頑なにされた、とあります。ここまで読んで来られたら分かると思います。主は、心を広げようとしている者の心を頑なにしようなどとは決してしません。もう既に心を硬くしている者に対して、その者に対して裁きを行われるために、

その心を硬いままに捨て置かれるのです。そして、ご自分の裁きを行われる時に、「頑なにする」ということを行われます。

### 3B すべての災害 13-35

#### 1C 忍耐される方 13-21

<sup>13</sup> 主はモーセに言われた。「明日の朝早く、ファラオの前に立ち、彼に言え。ヘブル人の神、主はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。』

ついに第三ラウンドに入ります。朝早く、ファラオの前に立つところから始まります。第一と第二では、川岸のところに来ていたファラオに、モーセが会いに来ていましたが、川岸のところまでもファラオが行っていない可能性がありますね。彼はもう、気力がなくて動けないのかもしれない。

そして、もはやアロンの名がありません。モーセは、アロンを代弁者として語っていましたが、もはやそのようなことは行っておらず、彼自身が直接、対峙しているのでしょう。ファラオにとって、モーセは神のような位置に立っていましたから、その衝撃はかなり強いものです。

<sup>14</sup> 今度、わたしは、あなた自身とあなたの家臣と民に、わたしのすべての災害を送る。わたしのよな者が地のどこにもいないことを、あなたが知るようになるためである。

最後の三つの災いの特徴がここに書いてあります。「わたしのすべての災害」であります。神が、ご自分の民を出て行かせない罪に対して、あらん限りの災いを下すということであります。以前、将来、神がご自分の怒りを現わす大患難は、このエジプトに対する神の裁きを原型として行われる話をしました。大患難において、神が最後に下す七つの鉢の災いについて、主はこのように言われました。「ここに憤りは極まるのである。(15:1)」神の憤りの極みまでが現れたということです。

そして、第七の災いの目的がここに書かれています。「わたしのよな者が地のどこにもいないことを、あなたが知るようになる」ファラオは、自分も神だし、エジプトの神々を信じていました。そしてヘブル人の神を同列に考えていました。つまり、自分が中心で、自分の治めているエジプトも自分のものであるとする高ぶりが、彼を支えていました。それを、まことの神が打ち砕かれます。聖書の歴史の中で、神が御怒りを現わされるのは、ご自身が他の神々と同列に置かれた時でした。例えば、アッシリアが、自分たちが征服した神々と、エルサレムの神を一緒くたにしたので、アッシリア軍を打ち滅ぼされました。

私たちが世に生きて、何をもって高ぶっているかと言いますと、それは自分が中心で、自分の周りのものは自分でコントロールしているという高ぶりです。世はそのことを知らないの、「なぜ神だけなのか？」「なぜイエスだけなのか？」と言います。他の神々と呼ばれているもの、偉大だと

呼ばれているものと同列において、神とキリストを考えます。しかし、イエス・キリストがいかに偉大で、いかに独特で、比類なき方であるかたを知ることによって、まことの神に出会うことができます。

<sup>15</sup> 実に今でも、わたしが手を伸ばし、あなたとあなたの民を疫病で打つなら、あなたは地から消し去られる。<sup>16</sup> しかし、このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである。

ここに、神の寛容さが表れています。神は、彼らを今、滅ぼすものならいとも簡単にできたと言われます。そしてパロが民を出て行かせないことを神はよくご存知でした。それにも関わらず、彼らに猶予を与える形で災いを下しておられるのは、彼らに忍耐しておられるからです。私たちは、神のさばきや災いを見て、「なんと神は厳しい方で、ひどいのか！」と非難しますが、いやいや、冷静になって考えてみれば、「神は、なんと忍耐深く、寛容なのか！」となるはずです。

神はたとえ、その人が最後まで悔い改めないことを知っておられながらも、最後までその機会を与えてくださる、公平な方です。「ローマ 9:22 それでいて、もし神が、御怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられたのに、滅ぼされるはずの怒りの器を、豊かな寛容をもって耐え忍ばれたとすれば、どうですか。」イエス様は、イスカリオテのユダに対しても同じようなことを行われていました。ユダがご自分を裏切ることは、分かっておられました。けれども、主は最後の最後まで、実に最後の晩餐の時までユダに対して、悔い改めることのできることを伝えておられました。

そして、この寛容な取り扱いと共に、主が意図されているのは、「わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるため」とあります。主は、頑なに民を行かせないファラオを用いて、ご自分がどのような神なのかを世界に知らしめる目的を持っておられるのです。これまでの災いは、エジプトの中だけで語られて彼らはそれを覆い隠そうとすれば、歴史から隠せたことでしょう。しかし、これから三つの災いは隠せません。あまりにも徹底的なので、そのことでヘブル人の神がいかに畏れ多い方なのかを周りの民も知るようにするというものです。

後に、ヨシュア記でラハブがエリコで住民が恐れていたことを話したことを思い出してください。「2:9-11 彼らに言った。「【主】がこの地をあなたがたに与えておられること、私たちがあなたがたに対する恐怖に襲われていること、そして、この地の住民がみな、あなたがたのために震えおのいていることを、私はよく知っています。10 あなたがたがエジプトから出て来たとき、【主】があなたがたのために葦の海の水を涸らされたこと、そして、あなたがたが、ヨルダンの川向こうにいたアモリ人の二人の王シホンとオグにしたこと、二人を聖絶したことを私たちは聞いたからです。11 私たちは、それを聞いたとき心が萎えて、あなたがたのために、だれもが氣力を失ってしまいました。あなたがたの神、【主】は、上は天において、下は地において、神であられるからです。」

<sup>17</sup> あなたはなお、わたしの民に向かっておごり高ぶり、彼らを去らせようとしない。

ファラオの高ぶりは、神の民であるものを自分の所有物だと思っていたことです。すべては神から来ていることを認めないことが、高ぶりです。

<sup>18</sup> 見よ。明日の今ごろ、わたしは、国が始まってから今に至るまで、エジプトになかったような非常に激しい雹を降らせる。

エジプトの国が統一されて以来の激しい雹ということです。東日本大震災は、千年に一度の地震と呼ばれましたが、エジプトでは統一建国以来の恐ろしい災難であります。主が終わりの日、大患難の時にも同じように、これまでにない災いを降り注がれます。イエスが弟子たちに言われました、「マタイ 24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。」

<sup>19</sup> さあ今、使いを送って、あなたの家畜と、野にいるあなたのすべてのものを避難させよ。野に残されて家に連れ戻されなかった人や家畜はみな、雹に打たれて死ぬ。』<sup>20</sup> ファラオの家臣のうちで主のことばを恐れた者は、しもべたちと家畜を家に避難させた。<sup>21</sup> しかし、主のことばを心に留めなかった者は、しもべたちと家畜をそのまま野に残しておいた。

主は選択を与えられています。そして、見事にそれに二つの反応が出ました。ある人は真剣に主のことばを受け取り、その通りに動きました。別の家臣は無視しました。いつでも、私たちには、主の御言葉に対して二つの反応があります。行動を持って反応するか、それとも何の行動も取らないかの二つです。

ところで、先にエジプトの家畜が疫病で倒れたのに、なぜここでファラオの家臣たちが家畜を有しているのか、という疑問を抱く人がいるかもしれません。まず知らなければいけないのは、災いと次の災いの間には時差があるということです。その期間にエジプトの役人たちは、外国から家畜を取り寄せたのでしょうか。エジプト人が、外国から家畜を取り寄せるという記録が残っています。

### 2C 前代未聞の災い 22-26

<sup>22</sup> そこで主はモーセに言われた。「あなたの手を天に向けて伸ばせ。そうすれば、エジプト全土にわたって、人にも家畜にも、またエジプトの地のすべての野の草の上にも、雹が降る。」<sup>23</sup> モーセが杖を天に向けて伸ばすと、主は雷と雹を送ったので、火が地に向かって走った。こうして主はエジプトの地に雹を降らせた。<sup>24</sup> 雹が降り、火が雹のただ中をひらめき渡った。それは、エジプトの地で国が始まって以来どこにもなかったような、きわめて激しいものであった。

雹のみならず、火も含まれていました。雷も含まれていました。ここに、神の聖なる姿、また裁かれる姿が現れています。雹による災いも、終わりの日における神の怒りの型になっています。黙示録 8 章にラッパの災いがありますが、第一のラッパが吹き鳴らされた時に、「血の混じった雹と火が現われ」とあります(7 節)。そして最後の最後の災い、第七の鉢がぶちまけられた時も、雹が地上に降りました。「16:21 また、一タラントほどの大きな雹が、天から人々の上に降った。この雹の災害のために、人々は神を冒瀆した。その災害が非常に激しかったからである。」

<sup>25</sup> 雹はエジプト全土にわたって、人から家畜に至るまで、野にいるすべてのものを打った。またその雹は、あらゆる野の草も打った。野の木もことごとく打ち砕いた。

主を恐れていない人は、隠れていなかったのでしょうか、そのまま打ち殺されました。家畜も同様です。そして、野にある草も木も、打たれました。エジプトにとって、作物に被害が及ぶということは自分たちの生命や拠り所を断たれるような、非常に強い衝撃であったに違いありません。経済はズタズタになり、ファラオに対する信頼や威厳は、エジプト人に失われていっていると思います。

主は今、ご自身が天においても主であり、地においても主であることをはっきりと示しておられます。彼らの所有しているものに手を触れた主は、根本的に彼らが支えられている地上を、また天に災いをもたらすことによって、彼らを揺り動かしておられるのです。終わりの日も同じですね。天も地も揺り動かされる災いです。

エジプト人は、空も、地も神としていました。地については、ブヨの災いのところで話しましたが、ケブという神でした。そして空の神も同じところに描かれていますが、「ヌト」と呼ばれます。



<sup>26</sup>ただ、イスラエルの子らが住むゴシェンの地には、雹は降らなかった。

ここに、救いがありました。イスラエルは雹の災いから、安全に守られていました。私たちの救いも、神の怒りからの安全な守りがあります。「神は、私たちが御怒りを受けるようにはなく、主イエス・キリストによる救いを得るよう定めてくださったからです。(1テサロニケ 5:9)」

### 3C 憐れみを利用した高ぶり 27-35

<sup>27</sup> ファラオは人を遣わしてモーセとアロンを呼び寄せ、彼らに言った。「今度は私が間違っていた。主が正しく、私と私の民が悪かった。<sup>28</sup> 主に祈ってくれ。神の雷と雹は、もうたくさんだ。私はおまえたちを去らせよう。おまえたちはもう、とどまってはならない。」

ファラオは、さらに突っ込んだ、悔い改めに聞こえるような発言をしています。はっきりと「間違っていた」と言っています。そして、「主」を正しいとし、「私と私の民が悪かった」としています。これが、はっきりとした悔い改めです。

しかし、彼の心には欺きがありました。「神の雷と雹は、もうたくさんだ」というところです。真実な悔い改めと、そうでないものの違いです。主がなされている仕打ちについて、その裁きについて、甘んじて受けているか、ただその状況から脱却したいから言っているのかは、大きな違いです。

イエスと共に十字架に付けられた囚人二人がいます。「ルカ 23:39-43 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。おれたちは、自分のしたことの報を受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」十字架からの救いと、魂の救いの違いです。

<sup>29</sup> モーセは彼に言った。「私が町を出たら、すぐに主に向かって手を伸べ広げましょう。雷はやみ、雹はもう降らなくなります。この地が主のものであることをあなたが知るためです。<sup>30</sup> しかし、あなたとあなたの家臣はまだ、神である主を恐れていないことを、私はよく知っています。」

地は主のものであり、ゲブのものではないし、ましてやファラオのものではありません。

そしてモーセは、既に何度となく、ファラオとその家来たちの心を見てきました。人の心の欺きを見てきました。頑なな心にある欺きです。「ヘブル 3:12-13 兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なにならないようにしなさい。」

<sup>31</sup> 亜麻と大麦は打ち倒されていた。大麦は穂を出し、亜麻はつぼみをつけていたからである。<sup>32</sup> しかし、小麦と裸麦は打ち倒されていなかった。これらは実るのが遅いからである。

おそらくこの時期は二月頃でしょう。亜麻も大麦も三月に収穫が行われます。けれども小麦は四月頃の収穫です。ちなみに、イスラエルでは大麦が四月に収穫、小麦が五月下旬に収穫です。ここでの味噌は、まだ打ち倒されていなかった作物があったということです。

<sup>33</sup> モーセはファラオのもとを去り、町を出て、主に向かって両手を伸べ広げた。すると雷と雹はやみ、雨はもう地に降らなくなった。<sup>34</sup> ファラオは雨と雹と雷がやんだのを見て、またも罪に身を任せ、彼とその家臣たちはその心を硬くした。<sup>35</sup> ファラオは心を頑なにし、イスラエルの子らを去らせなかった。主がモーセを通して言われたとおりであった。

ファラオは、難を逃れた小麦を見たのでかたくなになりました。「なんだ、まだ希望があるじゃないか。」とエジプトに対する誇りと自慢を捨てることがなかったのです。私たちはわずかな希望を自分自身のうちに見出すと、それがいかに頼りないかは見ずして、「まだ自分はやっていける」と思ってしまうのです。

主は、悔い改めることができるように、全てを滅ぼさないでおられる忍耐深い方なのに、その忍耐を、自分を高ぶらせる機会として使ってしまいました。主の忍耐を、主の弱さと受け取る、人間の愚かさがあります。